

chapter 01

3年間の 活動で、 みえたもの。

SOUPのケーススタディ 2014—2017

2014（平成26）年度から

活動を始めたわたしたちSOUPは、

これまで障害のある人・家族、福祉、芸術文化、
教育、NPO、企業、行政など、

多様な分野との連携を得て、活動を展開してきました。

ここでは、3年間の取り組みの中で

特に他地域でも応用でき、芸術文化活動の価値を
広げる可能性がある事例について、

なぜ実現できたのか、その仕組みを明らかにします。



宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会

めぐるみやぎのアート展 SOUPのホップ・ステップ・ジャンプ



「まぜると世界が変わる」をコンセプトに2014年度から活動をスタートした、わたしたちSOUP(障害者芸術活動支援センター@宮城)は、2014年度に仙台市と山元町、2015年度には石巻市と仙台市で、地域の障害のある人や地域のキーパーソンたちを中心に参加型の展示会をつくりました。そして2016年度は山元町、石巻市に生まれた新しいアートスペースで展示会を開催。初めて栗原市では地域の障害のある人とアーティストのコラボレーションによってつくりあげる展示会を行いました。

●主催：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン ●特別協力：NPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房、風の沢ミュージアム、特定非営利活動法人帰園田居創生機構、特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房、halken.LLP、特定非営利活動法人ボラリス ●後援：宮城県、栗原市、石巻市、山元町、宮城県社会福祉協議会、仙台市社会福祉協議会、栗原市社会福祉協議会、石巻市社会福祉協議会、山元町社会福祉協議会、公益財団法人宮城県文化振興財団、公益財団法人仙台市市民文化事業団、河北新報社

くりのはらのアート展

みつける／つなげる

企画・運営：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン
東北事務局

開催期間：2016年11月5日(土)～11月27日(日)

開催日時：期間中の金・土・日曜、11:00～16:00

会場：風の沢ミュージアム

住所：宮城県栗原市一迫片子沢外の沢11

障害のある人や市民、アーティストが参加して行う「みつける／つなげるワークショップ」で生まれた作品を、古民家を生かした現代美術館「風の沢ミュージアム」に展示。栗原のみなさんが参加しながらつくりあげました。

【展示内容】

●「みつける／つなげるワークショップ」で生まれた作品展示
ファシリテーター：齋正弘(宮城県美術館教育普及部学芸員)、土屋麻美(風の沢ミュージアム美術スタッフ/テ藝社)、瀬尾夏美(画家・作家)

●一緒に服をつくってみるワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」による作品展示

ファシリテーター：中村紋子(美術家)、多夢多夢舎中山工房

●SOUPセレクト展

作家：片寄大介、大竹徹祐、松浦繁 ほか

【イベント】

●プレイベント「表現するところ・からだを育てる@栗原」

日時：10月19日(水) 13:00～15:30

会場：風の沢ミュージアムの里山(雨天時は風の沢ミュージアムのカフェ)

ファシリテーター：里見まり子(即興舞踊家・宮城教育大学特任教授)、山路智恵子(即興音楽家)

●オープニングセレモニー&ギャラリーツアー

日時：11月5日(土) 11:00～12:00

会場：風の沢ミュージアム

【協力団体】

医療法人財団姉齒松風会・栗原市東部地域活動支援センターたんばぼ、風の沢ミュージアム、特定非営利活動法人帰園田居創生機構、社会福祉法人栗原秀峰会、特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房

いしのまきのアート展

コラボノカタチ

企画・運営：NPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房

開催期間：2016年11月19日(土)～12月25日(日)

開催日時：期間中の土・日曜、祝日、11:00～17:00

会場：ペンギンズギャラリー

住所：宮城県石巻市立町2-6-25

石巻の障害のある人と技術を持った人がコラボノカタチ(作品)を協働制作。個性にあわせて関わり方はさまざま。一緒につくったり、離れ離れでつくったり、解体したり再構築したり。出会いとコラボレーションでおこる化学変化により、作家本人も驚くような作品が登場しました。

【展示内容】

石巻の障害のあるアーティストとデザイナー、テキスタイルを学ぶ学生などが協働でつくる作品など、さまざまなコラボノカタチを展示。ギャラリーを抜け出して、商店街の中にもコラボノカタチが登場しました。

【協力団体】

東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコース、Tree Tree Ishinomaki、二色餅、日和スタイル、BUBINGA.s.y.

やまのものとアート展

ふっ・こう・ふく

企画・運営：特定非営利活動法人ボラリス

開催期間：2016年11月15日(火)～12月11日(日)

開催日時：期間中の火・木・土・日曜、10:00～15:00

会場：ボラリス&『こう・ふく』アトリエ

住所：宮城県亶理郡山元町高瀬字合戦原72-64(ボラリス)

これまで国内外のさまざまな方と出会い、多くの表現活動(絵画・ダンス・カフェ)が生まれました。それらの表現活動を展示・発表することで、障害のある人の生き方やたらし方の「可能性・多様性」をみなさんに共感していただき、震災から6年目の「復興」「生きる力の取り戻し」「これからの幸せのあり方」を考える交流の場をつくることを目標に行いました。

【展示内容】

『『こう・ふく』アトリエ』での作品展示

ボラリスを代表するアーティスト牧稔さんの人生にスポットをあてた個展。

【関連展示・イベント】

●壁画「HAPPYやまのもと」紹介パネル展示@ボラリス

会場：ボラリス ※ふっ・こう・ふくと同時開催

●ダンスパフォーマンス「HAPPYやまのもと～ダンスでHAPPY～」

日時：2016年12月4日(日) 11:00～ ※雪決行

会場：フレスコキクチ山下駅前店壁画前(JR山下駅前)

助成：三菱重工みやぎ・ふくしまミニファンド

【協力団体】

NPO法人アートワークショップすんぷちよ、株式会社キクチ、クロスロードアーツ、山元町合戦原区、山元民話の会、臨時災害FM局りんごラジオ

3会場を巡回！ワークショップ

「タムタムと、めぐるトワル」

企画・運営：特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房

●くりのはらのアート展 会場：風の沢ミュージアム(宮城県栗原市一迫片子沢外の沢11)

日時：10月30日(日) 11:00～14:00、11月12日(土) 11:00～14:00

●いしのまきのアート展 会場：共生型福祉施設織音(宮城県石巻市中浦1-2-62)

日時：11月26日(土) 11:00～14:00

●やまのものとアート展 会場：合戦原学堂(宮城県亶理郡山元町高瀬合戦原30-5)

日時：11月24日(木) 11:00～14:00

トワルとは、オーダー服の仮縫いに利用されたデザインサンプルのこと。このトワルをキャンバスとして捉え、参加者に自由に絵を描いてもらうワークショップです。おしゃべりが大好きな多夢多夢舎中山工房的メンバーが県内3カ所をめぐり、みなさんに会いに行きました。



case study 01

積みあげた ノウハウを生かし、 栗原の山里で 新たな挑戦！

「活動がない」「場所や設備がない」「支援する人がいない」。
そんな地域でも、人と人や場所をつなぐこと、
一緒にやってみることで生まれる新しい可能性がたくさんあります。

●写真：「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」オープニングセレモニー

この事例のポイント

- point 01 「やりたい」という気持ちを発信。思いが合致した人と人をつなぐ。
- point 02 人材や場所や材料、何が必要か考え、手が足りなかったら専門家と一緒にやってみる。
- point 03 展示、鑑賞、検証することで、新しい出会いや可能性が生まれる。

【宮城県栗原市】

人口70,357人(2017年2月末現在)／宮城県北西部に位置する市。
岩手・宮城内陸地震で被災した栗駒山麓の崩落や地すべりなどの景観を、
防災教育・学術研究・観光などに活用し、地域活性化を図るため、日本ジオパーク認定をめざす。

【主要な活動】

2014年 キーパーソンになる福祉、美術の関係者が展示会を訪問し、SOUPとつながる。
2016年8～10月 アーティストらと福祉施設を訪問調査ワークショップを開催。
2016年11月 「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」を開催。



story 01 宮城県北、 新しい地域での展開

SOUPは、新しい地域として宮城県北での普及活動を検討していました。その際に「やりたい」という思いのあるキーパーソンがいて、かつミュージアムがある栗原市での展示会を企画することに決定。福祉施設の相談支援員とミュージアムの美術スタッフが中心となり、会場の設定や連携できる福祉施設や団体のコーディネートを行いました。

story 02 ミュージアムとの 連携

連携した風の沢ミュージアムは個人が運営する施設でしたが、特定非営利活動法人帰園田居創生機構を立ち上げ、芸術活動を通じた地域振興事業や、地域の生涯学習拠点としての活動に力を入れていきたいという思いを持っていました。ミュージアムの特別協力のもと、展示会場として借用できることになりました。

story 03 まずは、 始めてみる

SOUPは、最初に栗原市の福祉施設を訪問しました。その結果、表現活動に力を入れている施設が少ないことが明らかに。そのため、「みつける／つなげるワークショップ」と題したワークショップを通して、アーティストや美術スタッフと表現活動を行い、展示、鑑賞するという体験から始めることとなりました。



●写真：みつける／つなげるワークショップ「ふうけいとときおくを描く」 ©瀬尾夏美

story 04 多様な表現を生むワークショップ

ミュージアムが位置する里山を会場に、2016年10月に身体で感じて表現する即興ダンスと音楽のワークショップを開催しました。「みつける／つなげるワークショップ」に参加していた福祉施設の障害のあるメンバーも参加し、その時感じたことなどが以後の作品制作にも生かされました。

story 06 3年間のつながりが生きた展示

会場となったミュージアムでは、SOUPがセレクトした宮城県の作家4人の作品76点を展示。展示を担当したキュレーターと作家を訪問、ヒアリングを丁寧に行い、作品に対する思いや背景をきき取り、展示構成しました。SOUPという中間支援組織が媒介となって、作家・支援者・キュレーターが有機的につながり、展示会を開催する方法や仕組みも整ってきています。

story 05 ついに開催！アート展

2016年11月「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」ワークショップを開催し、そこで生まれた作品などを展示。栗原市の障害のある人がつくった作品を展示、発表することが本人の自信につながり、福祉施設の職員や家族、一般の鑑賞者が障害のある人の表現の可能性に気づききっかけになりました。

story 07 オープニングイベントで「ハレの日」をつくる

オープニングセレモニー&ギャラリーツアーでは、会期前に即興ダンスと音楽のワークショップを行ったファシリテーターとともに、アート展の出展作家のみなさんや各地からの来場者が、色とりどりの紙テープや竹、ドラムを用いて即興パフォーマンスを行い、会場を彩りました。

story 08 そして、さらなる展開へ

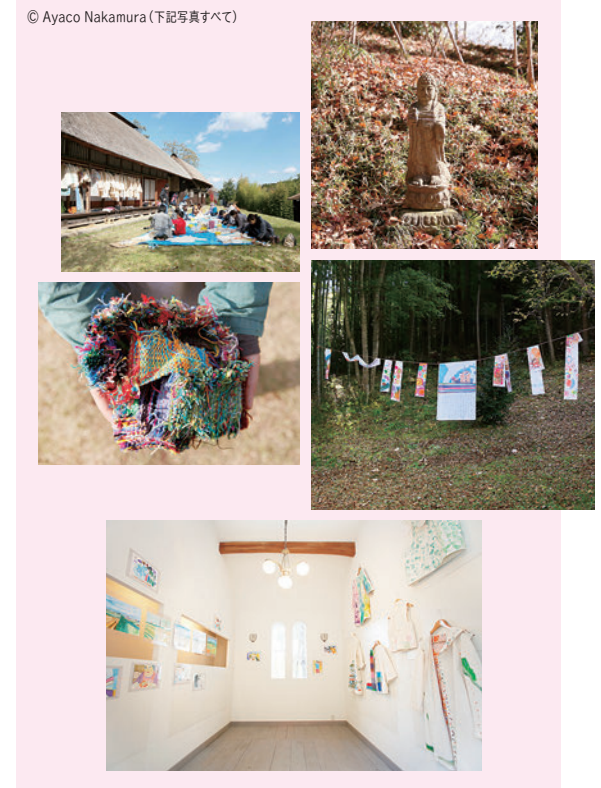
振り返りの場として、「みつける／つなげる語り場」を12月に開催し、ミュージアムがアートをきっかけにコミュニティスペースとしての役割を担うことができる可能性に触れました。「やりたい」という気持ちをSOUPはうけとめ、専門家とつなぎ、人材や場所や材料をどうすればよいか、一緒に考えます。

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 くりのはらのアート展 SOUPセレクト!!
SOUPがご紹介したい宮城県の作家4人の展示を行いました。
●写真：佐藤真彦(左上)、大竹徹祐(左下)、松浦繁(右)、片寄大介(下)



topic 02 くりのはらのアート展 みつける／つなげるワークショップ
ファシリテーター：瀬尾夏美(画家／作家)による「ふうけいときおくを描く」、土谷麻美(エデュケーター)による「いろと遊ぶ」、中村紋子(美術家)、多夢多夢舎中山工房のみなさんによる「タムタムとめぐるトワル@くりのはら」を行いました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01
社会福祉法人栗原秀峰会
障害者相談支援センターあらいぶ
菅原一住子さん



voice 02
画家／作家
瀬尾夏美さん



voice 03
エデュケーター
土屋麻美さん

環境を整えたら、メンバーのみなさんの新たな一面をみることができ、芸術活動に取り組む意味を発見しました。今後も何かしら続けていければと思います。

アートの本質に関わるような本当に貴重な体験をさせていただきました。「伝わらないこと」「わからないこと」の豊かさやそれでも表現しあうことについて、これからも考えていきたいです。

自分でみて、誰かにみてもらって…。この機会が、新しい楽しさや面白さを自分の感覚とつなげていける始まりになりますように。



●写真：「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」パンフレットより

case study 02

石巻のまちと 障害のある人の アートがまざった！

東日本大震災後の石巻市に芽生えた「新しいものが生まれる力」を
障害のある人の表現活動の機会づくりにつなげることを目的に、参加型展示会を開催。
「まぜる」をコンセプトにした、多様な人が集う対話の場となりました。

●写真：「いしのまきのアート展コラボノカタチ」たなごころプロジェクト制作風景

この事例のポイント

point 01 福祉、芸術、NPO、行政など多様なジャンルの人材が集まり、語る場をつくる。

point 02 集まった人たちと課題や目的を共有し、実践の機会をつくり、検証。

point 03 「今、ここにはないならみんなでつくろう」と働きかけること。

【宮城県石巻市】

人口147,485人（2017年2月末現在）／主要な産業は水産業。

東日本大震災による津波で旧北上川河口から逆流した水で旧市街地全域が浸水し、壊滅的な被害をうける。

【主要な活動】

2014年 SOUPがNPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房（以下ペンギンズアート工房）[※]の活動を訪問し記録した映像と作品を展示。

2015年 研修会を通して参加型展示会「いしのまきのアート展」を石巻市で開催、ペンギンズギャラリーをオープン。

2016年 ペンギンズギャラリーを会場に「いしのまきのアート展 コラボノカタチ」を開催。



story 01 活動の調査・記録が 最初のステップ

2014年、SOUPはペンギンズアート工房を訪問しました。その際に、工房での活動を動画で記録。その映像と工房のメンバーの作品を、2015年1月に開催した「はじめましてSOUP展」で展示しました。

story 02 活動訪問と語り場が 次の動きの下地になる

2015年、SOUPは活動訪問ツアー&語り場を開催。ペンギンズアート工房に福祉施設スタッフ、アーティスト、学芸員、大学教員らが集まり、「障害のある人の表現をひきだし、どう発信するか」「福祉をひらく」をテーマに対話の場を設けました。この語り場がその後の地域や多様なジャンルの人たちとのコラボレーションにつながります。

story 03 実践で学ぶ 研修を開催

学芸員やアートディレクターを講師に、展覧会をつくる実践研修「まぜる塾」を石巻で開催。福祉施設のスタッフや活動に興味を持った復興支援団体などが参加しました。SOUPは専門家をつなぎ、アドバイスをうけられる体制をつくり、参加しているみなさんが主体的に関わることができる環境をつくりました。

story 04 枠を超えた コラボレーション

2015年、市民と福祉、まちとアートが展示会を通して「まざる」ことで地域にとって新しい価値をつくることを目的に、震災後に生まれたコミュニティスペース、ギャラリーなど石巻市街地19会場で開催された、いしのまきのアート展。story02の語り場をきっかけに地域や団体を超え、ダンスと書のコラボレーションも行われました。

※ペンギンズアート工房…宮城県内の特別支援学校教員である（当時）宮川和子さんが、障害のある子どもたちの表現や能力の可能性に気づき、2011年に自宅工房を拠点としたアトリエ、ペンギンズアート工房を開設。学校を卒業したあとの生徒たちに文化活動の場として、家族とともに運営。アトリエからは多数の才能が輩出されています。

story 05 あらゆる立場から まちのことを考える

関連イベントの一つ「まきぐるみkappo」は、大学の研究室、復興支援団体、障害のある人、石巻市民の有志による協働企画。多様な立場の人たちが一緒にまちを歩き、あらゆる立場からまちのことを考えました。このイベントには社会福祉協議会が関わり、現在でもこのつながりがきっかけで、石巻のバリアフリーマップづくりが行われています。



●写真：「いしのまきのアート展」まきぐるみkappo

story 06 検証し、 次へのステップへ

2015年、仙台市で「石巻の『まぜる塾』実践報告会」を開催、アート展を振り返り、成果や課題を検証しました。障害のある人が社会に対して「まざる」には努力が必要ですが、アートが切り口になって地域に「まざる」きっかけになったと語った人もいました。その内容を来場者と共有できたことが感動を生み、今後の活動のはずみとなりました。

story 07 アート展から発展、 ギャラリーが誕生！

「いしのまきのアート展」を開催した時に会場の一つとなったペンギンズギャラリーが、障害のある人やアーティストの作品発表の場としてギャラリー運営を継続することになりました。コンサートやトークイベントなどの企画も開催し、活動を発信しています。

story 08 コラボノカタチから、 「たなごころ」へ

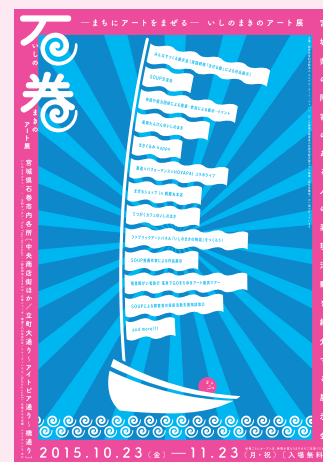
2016年、ペンギンズアート工房が「いしのまきのアート展 コラボノカタチ」を企画運営。デザイナーや学生、スタイリスト、地元の店舗が協働して制作しました。ペンギンズアート工房のアーティストと東北芸術工科大学テキスタイルコースが協働し、「たなごころ」プロジェクトが生まれました。専門家や協力者など外部の力をかりることが、更なる発展につながると確認できました。



●写真：「いしのまきのアート展コラボノカタチ」展示風景

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 いしのまきのアート展

2015年10月～11月／石巻市内商店街等19会場
まぜる塾の参加者と講師が、19人、143作品の展示を行いました。



topic 02 いしのまきのアート展コラボノカタチ

2016年11月～12月／ペンギンズギャラリー（石巻市）
「たなごころ」プロジェクト…ペンギンズアート工房のメンバー12人と、東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコースの講師と学生5人が、石巻と山形を行き来し交流を重ね、人の手から手へ渡してつくりあげた作品『つつみ』をつくりました。コーディネートは、2014年からSOUPのアートディレクションを行うhalken LLPの三浦晴子さん。石巻市立町の近隣店舗の協力により、店舗の商品が『つつみ』の柄のモチーフとなり、また一部の作品は石巻こけし、茶箱、一升瓶を包んだ状態で飾られました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01
ペンギンズアート工房
宮川和子さん



voice 02
東北芸術工科大学
テキスタイルコース専任講師
柳田哲雄さん



voice 03
東北芸術工科大学
テキスタイルコース1年
萩原希さん

学生との交流の中で、ペンギンズのメンバーの作品がアートに変わっていきました。誰かのものではなく、自分たち自身の作品でコラボすることができ、よかったです。

学生たちにとって大変貴重な経験となりました。このアートによるつながりが、長く広く“たなごころ(手の心)”を通じて多くのみなさんに届き、石巻の復興への一助となることを願っています。

ペンギンズのみなさんが描く絵は、線も色使いも純粋でかっこいいもの。芸術を学ぶ大学でもなかなか出会えない感性とコラボできて、新鮮でした。

case study 03

復興に貢献する 障害者アート



作品を展示することだけが障害のある人のアート活動の生かし方ではありません。

生活や地域などの環境から生まれてくる表現、またそれを生かす機会をとらえることも重要です。

ここでは東日本大震災からの復興途上の町での、障害のある人たちによる芸術文化活動を紹介します。

この事例のポイント

point 01 アートには人が生きることを助ける力がある。

point 02 自分たちの生活から生まれてくる表現とその魅力を観察する。

point 03 マネジメント～多彩な仕事や機会を生かそう。

【宮城県亘理郡山元町】

人口：12,471人（2017年2月末現在）／主な産業は農業と漁業。いちごとリンゴ、ホッキが有名。

【主要な活動】

2011年 山元町共同作業所工房地球村で障害のある人がアート活動始める。

2015年 参加型展示会実施。障害者アートを軸に活動する特定非営利活動法人ボラリス誕生。

2016年 ボラリスが企業からの壁画制作を受託、完成に至る。アトリエが開設。



story 01 復興支援活動から 生まれたアート

東日本大震災の影響により、仕事が激減した山元町の障害のある人たちが、アート活動を通して復興支援商品「いちごものがたり」の開発に取り組みました。SOUPは、色鉛筆、絵具、画用紙、筆などの材料と道具を準備し、活動に寄りそう芸術家派遣を実施しました。魅力的な作品が次々に生まれてきました。

story 02 障害者アート展が まちにやってきた

SOUPは参加型展示会「やまのもののアート展」を企画し、町内6会場で作品展を実施しました。宮城県内の障害のある人たちのアート作品を集め、展示することで、障害のある人の作品の質の高さや魅力を伝えました。期間中には県内外から約2,000人の来場者を迎えました。

story 03 アートを復興の力に NPO法人の誕生

展示会の反響は大きく、地元の工務店から新商品の販促ツールに使用するイラストの依頼が生まれ、チラシ、Webサイト、看板に採用されました。また、アート活動が地域の住民の交流を促し、復興途上の町の活力になるということを発見した障害のある人、支援者たちが自ら特定非営利活動法人ボラリス（田口ひろみ代表）を立ちあげました。

story 04 多彩な仕事や機会を マネジメントが生かす

2015年の秋、JR常磐線の復旧に伴い、新しい駅舎の建設が発表されました。駅に隣接するスーパーの社長から「町が元気になるアートをつくってほしい」と壁画の依頼を受け、SOUPはコンセプトの提案、アートディレクターの設置、仕事にかかる費用の予算化、依頼者への提案、進行管理などマネジメントを重視し支援しました。

story 05 地域の歴史に学び、 地元住民と壁画を制作

公共の広場に面する壁画は高さ2m、全長32mの大きさで、山元の古代から現代に至る風物詩がテーマ。制作プロセスと装飾内容を重視し、東北で伝承されているキリコで表現しました。障害のある人たちのほか、地域の中学生、民俗芸能団体が参加し、歴史文化に造詣が深い人たちと一緒に山元について学び、町のみなさんとともに制作しました。



●写真：「やまのものとアート展ふっ・こう・ふく」マキノノル展

story 06 祝祭空間を つくる

2016年10月に完成したJR常磐線山下駅前の壁画「HAPPYやまのもと」。壁画の完成と駅の再開を祝うため、ポラリスとSOUPは12月開催のダンスパフォーマンスイベントを企画。山元町の民俗芸能団体、町外のプロの即興音楽家とダンサー、仙台とオーストラリアのパフォーマーたちなどが、障害の有無に関係なく場を盛りあげました。



●写真：ダンスパフォーマンス「HAPPYやまのもと〜ダンスでHAPPY〜」 ©瀬尾夏美

story 07 大切にしている価値を 丁寧に発信

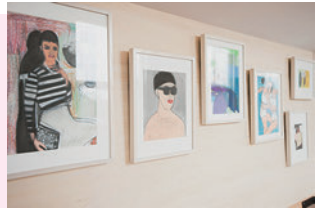
壁画完成と同時期に、ポラリスは2回目となる「やまのものとアート展」を企画・運営しました。会場は、ポラリスのこれまでの活動への信頼によって社会からうけとったギフトである「こう・ふくアトリエ」。ポラリスを代表するアーティスト、牧稔さんの72年にわたる人生にスポットをあてた個展を開催しました。

story 08 障害のある人と、ともに 豊かに暮らせる町に

SOUPは、障害のある人たちのアート活動が自らに力を与え、また地域で暮らす人たちに力を与えることを発見しました。山元町の資源は何か、山元町におけるアート活動のけん引役となるNPOの役割は何か。これらの資源を最大限に活用するマネジメントの重要性を伝え続けることもまた障害者の芸術活動支援の役割です。

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 復興支援商品「いちごものがたり」

東日本大震災の影響による、仕事の喪失という緊急のニーズから、商品のデザイン素材として絵画活動が始まりました。個人的な欲求から生まれる表現とは別に、ニーズから生まれるアート活動があります。

topic 02 やまのものとアート展

SOUPの初めての参加型展示会。2014年は被災した町内にあるコンテナ、町民の茶飲み場としての工務店、居酒屋などを会場に実施しました。ギャラリーや美術館に限らず、作品を展示する空間をつくることはできます。



topic 03 壁画「HAPPYやまのもと」

特定非営利活動法人ポラリスが企業から依頼をうけた仕事は、これまでに経験したことがない内容と規模でした。SOUPは資金繰りについても伴走しました。壁画の原型をつくるワークショップは助成金を活用、デザインの制作と管理は依頼企業から委託費をうけ取り、実現に至りました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01

特定非営利活動法人ポラリス
アートスタッフ

刈田路代さん



voice 02

株式会社キクチ
代表取締役会長

菊池逸夫さん



voice 03

特定非営利活動法人ポラリス
アーティスト

牧稔さん

みなさんが牧さんの作品、牧さんというアーティストのファンになっていただけたと感じています。声援をうけ、牧さんは自信に満ち溢れて生き生きと楽しそうに、嬉しそうに作品を描いています。

壁画完成のセレモニーは、まるで壁画の世界がそのままとびだしてきたようでした。依頼のテーマであった「町を元気にするアート」が文字通りここに完成し、障害のある人たちの新しい役割を感じています。

初めての個展でしたので、少しだけ恥ずかしい気持ちがありましたが、無事終了し、安堵しました。これからもアトリエで絵の勉強をしていきたいと思います。

この事例のポイント

point 01 課題や目的を理解し、マッチング、実践を行う。

point 02 視野を広げ分野を超えた協働がさらなる発展につながる。

point 03 多分野とのつながりやチャンスを生かす。

【宮城県仙台市】

人口：1,084,627人（2017年3月1日現在）／東北地方最大の都市であり、宮城県の県庁所在地かつ政令指定都市。

【主要な活動】

2011年 多夢多夢舎がデザイナーと協働を始める。表現活動を仕事にし、ブランディングを行い商品化、販売を開始。

2015年 美術家・中村紋子さんを紹介、トワルを用いたワークショップをスタート。

2016年 多夢多夢舎が運営するギャラリーdotがオープン。



story

01 表現や個性を生かした
新ブランドが誕生！

仙台市青葉区にある福祉施設多夢多夢舎中山工房（以下、多夢多夢舎）は、美術や身体表現活動を積極的に取り入れ、メンバーの個性を育んできました。2011年からの復興支援活動をきっかけに、SOUPは商品のブランディング支援に取り組み、「tam tam dot」が誕生しました。

story

02 仕事につなげる、
サポート体制

SOUPは新しい仕事につながるコーディネートやサポートを行いました。仙台クリエイティブ・クラスター・コンソーシアム（SC3）の助成によって、地場産業とコラボレーションした商品開発を行ったり、とっておきの音楽祭のチラシや商品パッケージイラストの依頼を受けるなど、コンセプトに惹かれた人たちからの依頼が増えました。

story

03 身体表現への取り組みが
次のステップへ

多夢多夢舎は身体表現活動にも力を入れていたので、障害のある人の存在や魅力をさらに生かしたパフォーマンスや接客などの新しい仕事の可能性がないだろうかとの相談。そこから、イベントでのパフォーマンスの仕事の紹介や、いしのまきのアート展のオープニングパフォーマンスをコーディネートしました。

story

04 美術家からの相談が
新しい作品制作へ

2015年、美術家の中村紋子さんからSOUPに、写真集の制作を検討しており、作家を探しているので紹介してほしいと相談がありました。SOUPは中村さんの主旨をきき、多夢多夢舎を紹介し、訪問。中村さんは多夢多夢舎のメンバーの自由な気質や雰囲気気に入り、新たな作品を撮影することになりました。

case study 04

人と人をつなぐ、
クリエイティブワーク

SOUPは、さまざまな相談を丁寧いきき、人や場所、機会とつなぐ支援を行っています。

人と人が出会い、障害のある人の新しい価値の発信につながる

「相談支援、ネットワークづくり」についてご紹介します。

story 05 トワルという方法、 トワルという画材

「このメンバーが服に絵を描いたら、面白いことになる!」と考えた中村さんは、株式会社タッドファーによる再利用プロジェクト「Re-Toile」(以下、トワル)を紹介。トワルとは、オーダー服の仮縫いに利用されたデザインサンプル。そのほとんどは破棄されますが、中村さんは「白いトワルは着られるキャンバス」と捉えました。



●「タムタムと、めぐるトワル」@いしのまきの様子

story 06 トワルに親しみ、 展示会に結実

トワルに絵を描き始めた多夢多夢舎のメンバーは、どんどん筆を動かすようになり、新しい表現方法を見つけるメンバーも出てきました。中村さんもたびたび多夢多夢舎を訪問し、撮影を行いました。そして2016年3月、多夢多夢舎が運営するギャラリーdotで展示会「タムタムと、めぐるトワル」を開催するに至りました。

story 07 広がるトワル、 広がる関係性

展示会来場者の中には、多夢多夢舎に遊びに来てくれる人や、作品として値段をつけていた服を購入する人も。同年5月には、一般の参加者も募ってトワルのワークショップを実施。2016年11月～12月に開催した「めぐるみやぎのアート展」をつなぐ企画として、ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」が県内3会場を巡回しました。

story 08 クリエイティブが 福祉をひらく

この試みを通して、各地域の障害のある人や、アートが好きな参加者との自然な交流が生まれていきました。多夢多夢舎のメンバーは場をなごませ、そこで会話が生まれます。多夢多夢舎と中村さんは、今後も継続してワークショップや展示会を実施していくほか、さまざまな人たちとともにトワルのワークショップの仕組みづくりにも取り組んでいきます。



●「タムタムと、めぐるトワル」@いしのまきの様子

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 tam tam dot

自由に「まる」(dot)を描くことからスタートしたデザインブランド。ポーチやペンケース、手ぬぐいなど、幅広い商品展開を行っています。

© Ayaco Nakamura (下記写真すべて)



topic 02 トワル

自由に描かれたトワルを実際に着てみて、記念撮影をする人も。この世界に—着だけの、自分がつくった特別な服です。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01
特定非営利活動法人
多夢多夢舎中山工房スタッフ
坂部認さん



voice 02
特定非営利活動法人
多夢多夢舎中山工房メンバー
森雄二さん 若月靖さん



voice 03
美術家
中村紋子さん

多夢多夢舎のみんなで、各地をめぐるって新しい建物や人に出会えました。1年近く一つの作品に取り組んでいる方もいます。トワルを通して、大好きなことを見つけられたことも大きな成果です。

これからどこかに行って、描いて、ご飯食べてというのを続けていきたいです(森さん)。トワルに描くと、色が鮮やかに出るので好きです。みんなでお喋りしたのが楽しかったです(若月さん)。

みんなが自由に「つくる」ことに集中できるようにしました。理由も意味も、いらない。よくわからないものをつくることを時々したほうがほんとうはよい、すごく大事なことだと思います。

case study 05

障害の内容を 理解し寄りそう

（視覚障害のケース）

「みえないこと＝芸術活動ができないこと」ではありません。

人が持つ五感を総動員すれば作品を鑑賞し、絵を描いたり写真を撮影することができます。

宮城の視覚障害のある人たちと取り組んだ活動の一部始終をお届けします。

●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、ブレンデンさんの作品を触って鑑賞

この事例のポイント

point 01 視覚障害のある人たちは、情報を得ること自体に壁がある。

point 02 視覚以外の感覚から写真を撮る動機と方法を得られる。

point 03 活動を阻害する“障害”は何かを明らかにする。

【宮城県内の視覚障害者に関するデータ】

宮城県内の視覚障害者数：5,257人（2016年3月31日現在、身体障害者手帳所持数より）／

宮城県内の視覚障害者を教育対象とした特別支援学校数：1校（2017年3月現在）／

宮城県内の視覚障害者福祉事業所数：1カ所（2017年3月現在）

【主要な活動】

2014年 盲聾の写真家、ブレンデン・ボレリー二さんが宮城を訪れ、ワークショップを行う。

2015年 山元町で鑑賞ツアーを実施。「いしのまきのアート展」で立体コピー写真を展示。

2016年 凹凸写真展「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES 誰かの靴を履いて歩く」を開催。

特別支援学校、
福祉事業所ともに
仙台市

story

01 ブレンデンさんとの 出会い

2014年12月、自分をとりまく世界を感じて写真を撮影する盲聾のブレンデン・ボレリー二さんがオーストラリアから宮城にやってきました。そこでブレンデンさんの表現と鑑賞方法に関してワークショップを企画、宮城の視覚障害のある人たちには、認定特定非営利活動法人ビートスイッチ（以下、ビートスイッチ）を通して参加を呼びかけました。

story

02 さまざまな協力を得て 撮影に挑戦！

二人の視覚障害のある人がブレンデンさんとともにカメラをもって外出。一人は車が好きで、乗り物の通過音に応じて、音の方向にレンズを向け撮影しました。また、仙台市内の文化施設のバリアフリー担当者に協力してもらい、会場使用を協力していただきました。撮影した写真は後日、オーストラリアの立体コピー写真で出力され、日本の撮影者たちに送られました。

story

03 山元町で アートに触れる小旅行

2015年2月「やまのものとアート展」では、市民プログラムとしてビートスイッチが「山元町へ、アートに触れる視覚障がい者旅行」を企画。参加した17人は山元町の風を感じながら、地元の方の案内により歴史を学び、郷土料理や名産のいちごを堪能しながら、story02で生まれた写真を鑑賞する機会をもちました。

story

04 写真撮影、展示と 実現のための関係性

2015年9月「いしのまきのアート展」では、ビートスイッチの安藤修二さんが盲導犬ヴァンと石巻を歩き、撮影した写真をアート展の会場で展示しました。SOUPは立体コピー機をコニカミノルタジャパンへ、カメラをニコンプラザ仙台へ借用の相談をし、展示を実現。ビートスイッチのメンバーたちは、電車で石巻を訪れる企画を実行しました。

story 05 ブレンデンさん、 再び宮城へ

2016年、ブレンデンさんが再び宮城を訪れるのにあわせて、大々的に写真を撮るワークショップを企画。これまで同様に、立体コピー機はコニカミルノタジャパンへ、カメラはニコンプラザ仙台へ借用を依頼し、どちらの企業からも快諾いただきました。また仙台市内の大学教員と大学生20人に参加者兼サポーターとして参加してもらいました。



●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、ペアになって撮影

story 06 同じ立場で撮影した 立体写真を展示

ワークショップではさまざまな人が同じ立場にたち、触覚、味覚、嗅覚を使い世界を感じ、それを一眼レフカメラで撮影。凹凸を感じながら鑑賞することが可能な、立体コピー写真として出力し、2017年1月には凹凸写真展「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES — 誰かの靴を履いて歩く」を開催しました。



●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、屋外に出て撮影

story 07 達成したもの、 これから必要なもの

2017年1月、「SOUP2016実践報告会」で、ブレンデンさんが所属しているコミュニティアート団体クロスロードアーツCEOのスティーブ・メイヤーミラーさんは、このように話を締めました。「地域が協力して、障害を持つ人びとが、もっと文化的に参加でき、文化資源を使うように、彼らのために時間、労力や資金そして志を持っていかなくてはなりません」。



●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、ファシリテーターのスティーブ・メイヤーミラーさん

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 安藤修二さんの撮影した写真

石巻には仕事で通っていたこともあったという安藤さん。かつての記憶を参考に、盲導犬ヴァンと一緒にまちを歩き、昔の石巻と現在の石巻をイメージして撮影しました。



topic 02 表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台の参加者が撮影した写真

ワークショップ「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES — 誰かの靴を履いて歩く」では、「あなたの靴、もしくは他の誰かの靴を撮影」「屋外に出て人間、自然、風景などを撮影」「ペアになり会話をしてから人物を撮影」という3つのエクササイズのプロセスで撮影を行いました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01

認定特定非営利活動法人
ビートスイッチ

安藤修二さん

撮影するときに、これまでのことが頭に浮かびました。新しい出会いや発見があったり、階段を一步一步登っているようでした。視力をなくして、本当のやさしさ、人の心に触れたような気がします。



voice 02

クロスロードアーツ/
写真家

ブレンデン・ボレリーニさん

カメラワークショップは素晴らしいと思います。なぜなら写真を撮り、そしてそれを3Dプリントでほかの人たちにみせることにより、写真というアートを楽しむことができたからです。



voice 03

表現するところ・からだを育てる
カメラ編 参加者

高橋浩枝さん

私はどんなに重度の障害があっても一人の人間! いつもそう心に思っています。なによりみなさんと出会えたことがとてもうれしく、私の生きるエネルギーとなりました。

宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会

SOUPのレシピ展 10の事例、100のキーワード

期間：2017年1月28(土)～30日(月) 10:00～19:00

会場：せんだいメディアテーク1階オープンスクエア

SOUPの3年間の活動の中で、つながった人、生まれたモノ、コトを10の事例、100のキーワードに整理(うち5事例は12-31ページのケーススタディを参照ください)。相談、人材育成、参加型展示会、鑑賞・対話、財源・マネジメント、著作権、ネットワーク、場所・材料・道具、発信という視点から、作品や関連する物、写真、映像などを紹介しました。



●写真：「SOUPのレシピ展」展示風景

●主催：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン ●後援：宮城県、仙台市、社会福祉法人宮城県社会福祉協議会、社会福祉法人仙台市社会福祉協議会、公益財団法人宮城県文化振興財団、公益財団法人仙台市市民文化事業団、河北新報社 ほか ●協力：医療法人財団姉歯松風会・栗原市東部地域活動支援センターたんぽぽ、NPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房、風の沢ミュージアム、特定非営利活動法人帰園田居創生機構、社会福祉法人栗原秀峰会障害福祉サービス事業所すぶりんぐ・障害者相談支援センターあらいぶ、クロスロードアーツ、特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房、東北工業大学ライフデザイン学部安全安心デザイン学科古山研究室、東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコース、認定特定非営利活動法人ばざーる太白社会事業センター(略称：ビートスイッチ)、halken LLP、特定非営利活動法人ポラリス ほか

「SOUPのレシピ展」関連イベント

SOUP 2016 実践報告会

日時・場所：1月28日(土) 14:30～16:30

会場：せんだいメディアテーク1階オープンスクエア

山元町、石巻市、栗原市で開催した「めぐるみやぎのアート展」(2016年11月5日～12月25日)や、SOUPの人材育成研修2016(2016年9月～12月)で行われてきた各地での実践を通していろんな人が出会い、どのような変化が起ころうのでしょうか。また、これからの課題は何がみえたのでしょうか。3年間の実践を踏まえて障害のある作家や関係者が集まり、話しあいました。



●写真：「SOUPのレシピ展」関連イベント「SOUP 2016 実践報告会」

【テーマと話題提供者】

- 1.《積みあげたノウハウを生かし、栗原の山里で新たな挑戦!》
菅原一住子(社会福祉法人栗原秀峰会障害者相談センターあらいぶ)／瀬尾夏美(画家、作家)
- 2.《石巻のまちと障害のある人のアートがまざった!》
柳田哲雄(東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコース専任講師)／宮川和子(ペンギンズアート工房)／三浦晴子(フォトグラファー／キュレーター／halken LLP共同主宰)
- 3.《山元町の復興に貢献する障害者アート》
刈田路代(特定非営利活動法人ポラリスアートスタッフ)／柴崎由美子(特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン代表理事)
- 4.《人と人をつなぐクリエイティブワーク》
坂部認(特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房スタッフ)／森雄二、若月靖(特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房メンバー)
- 5.《障害の内容を理解し寄り添う(視覚障害のケース)》
スティーブ・メイヤーミラー(特定非営利活動法人クロスロードアーツCEO)／ブレンデン・ボレリーニ(特定非営利活動法人クロスロードアーツメンバー)／安藤修二(認定特定非営利活動法人ビートスイッチ)

【コメンテーター】

齋正弘(宮城県美術館学芸員教育普及部)／アイハラケンジ(halken LLP／アートディレクター、東北芸術工科大学准教授)

【ピックアップ!】

スティーブ・メイヤーミラーさんからのメッセージ

このたび、わたしは視覚障害のある人たちとワークショップを実施しました。みえない人、みえる人、さまざまな立場の人が、触覚、味覚、嗅覚をつかい世界を感じ、その物語をカメラで撮影し作品をつくるものです。

今まで私たちは、情報によって世界を理解しようとしてきました。正確に物事を伝えるためには、情報が必要だからです。その情報(知識)があることによって、わたしたちは視覚障害のある人はみることができない、視覚障害のある人にカメラを与えても意味をなさないと考えてきました。

しかし、わたしたちアーティストは、作品をつくる時、材料としての情報とイメージーションを組みあわせて、新たなものを生みだしています。そう、わたしたちは、わたしたちの精神を通じてものをみているのです。

視覚障害のある人たちは以前なら、このようなアート活動に参加できませんでした。しかし今は、積極的にアート活動をしています。今は彼ら自身が彼らのストーリーを語り、彼ら自身が表現しています。わたしたちと同じように社会に参加し自由や平等を享受している。これは、どの社会でも理想とされるべき姿でしょう。

そうした意味で、ここ宮城ではじまった取り組み、そして今日のこの報告会は、まさにデモクラシーそのものといえます。みなさんとこれからも活動できることを楽しみにしています。